

Title	山本博士の思出
Author(s)	中瀬古, 六郎
Citation	経済論叢 (1941), 52(6): 740-742
Issue Date	1941-05
URL	http://dx.doi.org/10.14989/131552
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第五十二卷 第六號

昭和十六年六月

哀辭 故山本博士遺影及署名

論叢

支那の農家と田賦附加税……………經濟學博士 八木芳之助

佛印幣制論……………經濟學博士 松岡孝兒

企業者勞働費論……………經濟學士 大塚一朗

貨幣流通期間と平均生産期間……………經濟學士 青山秀夫

時論

重慶政府の戰時物價政策……………十龜盛次

記事

山本博士逝く

追憶文

神戸 正雄 末廣 重雄 牧野 虎次 中瀬古六郎 本庄榮治郎

谷口 吉彦 松岡 孝兒 大塚 一朗 堀江 保藏 穂積 文雄

高木 眞助 蟻川 虎三 石川 興二 金持 一郎 岡本 清造

附錄

彙報

外國雜誌論題

本誌第五十二卷總目錄

な覺悟と決意とに満ちて先生の遺志を繼がんと奮起してをつた時なのである。彼はこの歴史的的精神緊張時代の六ヶ年を通じて、豫備學校、普通學校、高等普通學校の課程を全速力を以て短縮修了したのであるから、その勵精奮闘の狀今にも想像されて餘りがある。

彼の父君なる鳥羽藩士山本昇平氏は、彼の幼少の頃既に他界されたけれども、その謹嚴清廉なる古武士の風格は完全にこの愛兒の一生に再現されたものと思はれ、彼の生れた時父君が鳥羽日和山々上より遠州灘を越へて遠く思を富士山下の三保の松原に馳する氣持で以て彼に命名したと云ふのも、此父ありて此兒あるかなとの感を深ふせしむるのである。しかも彼の母堂がまた深く維新時代の賢母烈女の操志を實踐して、同志社創業時代の堅信博徳の譽れ高き、ゴルドン博士の家庭に入りて、博士夫妻の救世愛人の事業を援けつゝ彼およびその兄妹等の教養に全力を傾注し、彼をしてゴルドン邸より同志社に通學せしめたのも、後年彼をして常に志を海上に親ましむるに至つた一の要因たらず

山本博士の思出

中瀬古六郎

山本博士は同志社出身者中にも稀有の存在であつた。彼が十九歳にして始めて同志社豫備學校に入學したのは、校祖新島先生が歿せられてから漸やく二年の後であつたから、所謂新島精神が最も深くまた高く校の内外に敬仰發揚されて、一千の男女學生がみな悲壯

るを得ないであらう。

新島先生歿後十有三年にして、同志社創業の當初より先生の片腕たりし、デヴィス博士（南北戦争の米國陸軍大佐）が英文新島傳の第二版を發行するや、山本氏は當時京都帝大法科大學聽講生としての最後の一年を苦學力闘の間に修了しつつも、渾身の熱と勇と誠を捧げて、之が譯述に従事し、明治三十六年七月を以て出版したのである。今試に之を翻讀するに、新島先生の熱血とデヴィス先生の獻身とが遺憾なく紙面に躍動して、譯者山本氏の至誠が、滴るばかりに文字の表に流露してゐて、讀者をして肅然襟を正さしめずんば止まないものである。新島先生が晩年一學生に與へたる書信中に「良心の全身に充滿したる人才の出でんことを希ふ」と云はれたが、山本美越乃氏の如きは蓋し最も能く新島先生の望に酬ゆる性格の人であつたと思ふ。

彼は大正七年以來、或は同志社財團理事、或は校友会長、或は財團評議員として、至誠剛直、侃々諤々、時に辛辣骨を刺すが如き論議を以て當局を警發鞭撻し

たのみならず、明治四十五年以來同志社大學講師として文字通りに、峻嚴なる教鞭を揮ひ、以てその秋霜烈日の風格と精確明徹なる學說とを學生の腦裡に叩きこんだのである。

一方彼が至深なる孝心に就ては、次に引用する彼の親友、片野實之助氏の證言が、遺憾なく彼の面目を躍如せしめてをると思ふ。

山本君ガ母上ニ仕ヘテ至孝ナリシハ實ニ私モ感心シテオリマシタガ、ニウ・ヨークニテ私ト同室ニヲリシ時、或晩、在米數年ノ同君ノ友ガ訪ネテ來テ、初メノ間ハ實ニ親シキ話ヲ交ヘアイマシタガ、其内次第ニ高聲トナリ大激論トナリマシタ。聞クトモナシニ私が聞キタル處ニヨレバ、親ト妻子ヲ携ヘテ汽船ニテ航海中難破ノ厄ニ遭ヒシ場合、何人ヨリ先ニ救助スベキヤトノ問題ニ觸レタルモノニテ、山本君ハ先ヅ第一ニ親ヲ、次ニ子ヲ、妻ハ最後ト主張セルニ對シ、アメリカナイズシタル友人ハ、ソレハ理窟デ、實際ソノ場合ニハ先ヅ妻ヲ、次ニ子ヲ、次ニ親

追 憶 文

ノ順序トナルモノナリト語レルヨリ、親孝行ノ山本
君ハ激怒シ、貴様ハ日本人デハナイト言ヒ放チ、其
マ、物分レトナリ、私ハ其至孝ブリニ感服シタ事實
ガアリマス。
